
空を仰いで手を繋ごう

雲乃 十和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空を仰いで手を繋ごう

【Nコード】

N9977L

【作者名】

雲乃 十和

【あらすじ】

学校の“王子様”亨と付き合っている光姫^{みき}。だが亨は夜ごに違う女と夜を過ごし、光姫は昼休みを無言で一緒に過ごすだけの名ばかりの彼女。そんな時、転校生が現れる。彼は光姫の小学校の同級生だった。お前、そんなヤツだった？ 転校生の言葉が光姫の記憶を揺り動かす……

登場人物（前書き）

読み飛ばしていただいても何ら問題はありません。

登場人物

主要人物

幸田 光姫 (こうただ みき)

…… 主人公。 高校二年生

田村 亨 (たむら とおる)

…… 光姫の彼氏。 学校で女子に王子様と騒がれている。 高校二年生

篠原 律 (しのはら りつ)

…… 光姫の中学からの友人。 高校二年生

菅田 吉樹 (すがた よしき)

…… 転校生。 光姫の幼なじみ。 高校二年生

光姫のことをミツと呼ぶ。 光姫にはヨシと呼ばれている。

以下、後編からの登場人物

真由（まゆ）

……光姫の小学時代の友人

藤村（ふじむら）

……光姫のクラスメイト

前編

光姫は耳から落ちてきた髪をかきあげ、眉間を揉んだ。夜の自室。本来寛いでいるはずの時間である。こんな心労はまったく本意でない。携帯を八つ当たりと自覚しながら睨みつける。そのディスプレイには一応彼氏であるところの亨の浮気相手からの報告メールが勝ち誇ったかのように煌々と照らし出されていた。

なんで一々メールを送るんだか

同じ女という性を持つ者同士のはずだが、まったく理解できない。怒りというよりうんざりして光姫は携帯に手を伸ばし、壁に投げつけたい衝動を堪えてさっさと嫌味たっぷりの文面を削除する。名前ばかりの彼女でもうらやましいのだろうか。

「……………はア」

苛立ちをこめて息を付き、それでも体内にはまだまだそれが残っている。光姫は電話帳を開いた。

篠原、篠原……………と。

通話ボタンを押そうとしてふと手を留める。きっとこれは彼女にとってどんなに辛いことだろう。親友に好きな男の浮気の愚痴を聞かされるのは。他の友人にかけようかと逡巡する。しかしそんなことを相談できる友人は他にいなかった。しかも律は光姫が律の想いに気づいていないと思っっているからややこしい。実際、一週間前までかけらも気づいていなかったのは光姫なのだが。

「っあー、面倒!」

いっそ隠者のように山に籠って暮らしたい。

ブルル、ブルル

「……………」

考えているあいだに習慣に従って指が押してしまっていたらしい。
どうしよう、焦る間にも時は流れ、

『もしもし。……………もしもし?光姫?』

律は電話に出ってしまった。

「あー……………もしもし」

『あ、やっぱり光姫か。何も言わないから何かと思っちゃった。
もしかしてまた王子が浮気?』

出るまでの間を光姫が落ち込んでいるからと解釈したらしい。

「あー……………」

嘘をつくべきだろうか。迷っている間が律には傷ついているから
だと解釈したのか、思いやりに溢れる声音で気遣う。

『光姫?大丈夫?よっぽどひどかったんだ?』

「んー……………や、いつも通り。浮気相手からメールが来ただけ」

『だけって……だけじゃないよ』

「本当、私のプライバシーどこいったんだかって話だよ。個人情報報どっから流出してんだか」

そして何故一々報告メールを送るのか。名ばかりの彼女がうらやましいんだろうか。昼休みと一緒に過ごすだけなのに……ひよっとしてすごく羨ましがられているかもしれない。三ヶ月ほど互いに一言も喋ってないが。

精神安定剤なだけなのに。

その一点において彼女達と光姫はまったく同等だ。

『そついう話じゃ……いや、それもあるけど』

「何回メルアド変えても効果ないし。私のストーカーしてんじやないのかって思うよ。やるんなら亨のストーカーやってよね」

しまった。亨から話を反らそうとしたのに、戻ってしまった。

冷や汗をかいた光姫を知らず、電話の向こうの律は平然としていた。少なくとも光姫に窺えるかぎりでは。

『ひよっとして兼任してたりして』

「私のと亨のと?」

想像して光姫の顔が洪くなる。

「いやーけどさ、もう。諦めてるし」

『光姫……』

律の心配に光姫の顔が少し緩んだ。心配をかけていても、自分の存在を心にかけてもらえないのは嬉しい。それでも投げやりな気持ちは変わらなかった。まるで窒息死をじっと待っているかのようだと思ふことがある。それでもどうにかしようという気がそもそも湧いてこない。

『……やっぱり、別れたら？』

たくさんの心配と優しさと罪悪感が含まれた言葉。

やっぱり、電話するべきじゃなかった。律にこんな思いをさせるなんて、分かりきってたのに。ちくちくと、罪悪感が胸を刺す。

「んー……」

曖昧に答えてやり過ごす。正直な所、別れ話を切り出す気力もなかった。過去に何度か切り出したのだが、亨は頑として首を縦に振らないのだ。“約束”を持ち出されては光姫も亨を受け入れるしかない。だが亨を想う律にそんなことを言えやしない。一週間前まで何も気付かずと言っていたのだから今更ではあるが。

なんで私に執着するんだろう。

美人ではない。特別気立てが良くもない。友人も多くない自分の何が。体を求められたこともない。ただ黙って隣にいることだけを

求められる、精神安定剤。亨に取って私は何だろう、なんて無駄なことは言わない。答えは分かりきってるから。

「ありがとね。大分楽になった」

『話もろくに聞けてないけど、それならよかった』

「そんなことない」

光姫は心底答えた。律と話したことで浮気相手のことが気にならなくなったのは確かだ。律への罪悪感で浮気相手を気にしてる暇がない、というのが正しい。

「本当にありがと。じゃね」

『ん、バイバイ』

電話を切り、ついでに電源も切って光姫はベッドに寝転んだ。いつまで続くのだろう。まるで底無し沼に嵌まってしまったかのようにだ。ただ自分が深みに堕ちるのを傍観し続ける。

でも、その底無し沼を作ったのは私。私なんだ。

すべては一人の女性の死から始まった。

私が、殺した、から。

キーンコーンカーンコーン

鐘がなる。昼休みだ。授業から解放されるといふのに光姫は憂鬱だった。

教室と光姫を長く黒い髪が遮っている。俯く光姫の目に写るのは傷が入った机だけだ。ガタン、と誰かが光姫の机に弁当袋を乗せる。誰か、ではない。学校の“王子様”である宮津亨だ。光姫が弁当を取り出すのを確認してさっさと歩き出す。光姫はため息を押し殺して従った。どんな風に見えているんだろう、光姫はふと考えた。あんまり彼氏と彼女がお昼ご飯の図には見えないだろうな。

宮津亨という男はとにかく誘蛾灯のように女を引き付ける男だった。光姫はゴキブリホイホイのほうが相応しいと思っているが、以前そう例えると顰蹙を買ったので自粛している。整って甘い顔立ちに優秀な成績と運動神経、しかも父親は医者だ。中学生の時に母親を亡くしたという過去が陰を添えていて、それがまた魅力を増しているのだろう。かなり素っ気ない性格でクラスでも孤立しているらしいが、女子に言わせるとその性格がまたイイらしい。結局面がよければなんでもいいんじゃないかねえか、と前にクラスの男子が叫んでいた。光姫も同感だ。

昔は、こんなじゃなかった。こんなじゃなかった、のに。

戻れない過去に懐かしさと切なさを感じたその瞬間に亨が振り返り、光姫の体がビクツと震えた。

う、わ。見透かされたのかと思った。

そして、責められるのかと。お前が全てを壊したくせに、と。

私、弱いなあ。事実なんだから。加害者が被害者面してんじゃないっての。

無表情の下で自分を罵る。光姫はきゅっと唇を噛み締めた。

中編

疲れた。

ホームルームまでの時間。ずっと律と話していたのに、今日は律と目が合っただけですらいない。これは何を意味するのか。

「はア……」

ため息が堪えられない。きつと今までで幸福は全部逃げ出してしまった。これからは悪いことが逃げ出せばいいのに。

ああ、でも。全部逃げ出してしまえばどうなるのだろう。ブラスもマイナスもない、完全なゼロ。それは、死？

その考えにククツと笑った時、ガラ、と扉が開く。その音で光姫は我に返った。暗い、暗すぎる！自分の思考の暗さに愕然とする。それでも、それが、なんだと言っただろう。自分がいなくなってもきつと何も変わらない。だってそもそも死ぬべきだったのだ。あの人を身代わりにしたあの時に。

突然クラス中がざわめきだした。

「せいを紹介する」

転校生を紹介する。

どうでもいい、と光姫は窓を眺めつづけた。外には重苦しい曇天が広がっている。顔の周りに垂れた髪が光姫とクラスを隔絶してい

るかのようだった。 クラス中がざわいている。 きゃあ、と黄色い声が上がった。ざわめきが大きくなる。

ダン！

「おい」

「……はい？」

クラス中が混乱の坩堝に叩き込まれていた。 その中には光姫も含まれる。

窓から目をひっぺ剥がし、机に乱暴につかれた手を辿って顔まで行き着く。日に焼けた精悍な顔があった。例えば亨ほどには整っていないが、まるで明るいエネルギーが全身から放射されているようだ。 太陽みたいな。ぼうつとそう考えながらも光姫はぐぐつと顔を後ろに逸らした。 転校生がぐぐつと顔を近付けてきたからだ。

「何しけたツラしてんだよ。似合わなさ過ぎて気色悪い」

「はっ？」

あんだ誰、から、しけたツラが似合うヤツがいるか、まで頭の中が言葉で溢れかえるものの口からでない。ただ口をパクパク開閉させる光姫に向かって転校生は遠慮なく述べた。

「馬鹿な金魚みてえ」

「は……てかあんだ誰いやいきなり何……」

転校生はわざとらしく大きなため息をつくとさらに身を傾けた。
光姫も後ろにのけ反る。

「俺がわかんねえの？ 姫が似合わない馬鹿ミツ」

それは、小学生の頃の、引越す前のあだ名。怒る光姫に無理矢理その名を付けたのは。

「サルヨシ……！？」

「オッホン！ 菅田君、旧交を温めるのは後にしなさい」

「オーツス」

全く悪びれないで教壇に戻る転校生　菅田吉樹を光姫は啞然と見ていた。

朝から律が私を見ない。

どういうことか見当はついていないが認めたくない。しかしそう考えている時点で自覚していて、光姫はどうしたものかため息をついた。しかも律がいないと話しかけてくる人間は一人もいなかった。

友達少ないなあ……

人だかりの中から物言いたげに光姫を見つめる猿は一匹いたが。その猿は今サッカーをやるうと誘われていた。早速クラスに馴染んでいる。昔のようにガキ大将になるのもすぐだろう。懐かしさに口元が緩みかけ、光姫は唇を噛んだ　　が。

「おいミツ、サッカーやるーぜ！」

馬鹿だ、馬鹿猿だ！しかも小学生からちつとも成長してない！

「おいミツー！」

吉樹の脳天気な声がクラスに響き渡っていて、クラスメイトがギョツとしている。

「おい、菅田」

「ん？アイツ結構上手いぞ」

そついつ問題じゃない。

「」の「」

阿呆、と叫びそうになった光姫は立ち上がったところで二つのも
のを見つけて固まった。教室の入り口まで来た亨と、吉樹に話しか
ける律の姿だ。

「ん、俺達同小なんだ」

クラス中の関心の的 すなわち二人の関係を聞いているらしい。
律の声はともかく吉樹の声はよく通る。しかも声を小さくしようと
いう気がまったくないからよく聞こえた。

「ミツと？悪友かな」

ガタン、と光姫の机に弁当袋が置かれた。光姫は自然と俯く。肩
から髪がこぼれ流れた。黒いそれは今日の空のように重苦しいと光
姫はふと感じた。顔の強張りを自覚しながら光姫は無言で弁当を出
す。亨の表情は見えなかった。瞳だけが澱んだ光を湛えている。

「放課後？空いてるけど」

チラリと亨の目が吉樹の方に動いた。

「そいつ、ミツの彼氏？」

バツチリ目が合ったらしい。爪先を見ていた光姫が顔を上げると
近寄った吉樹がジロジロ亨を見ていた。亨の表情からは何も読めな
い。

「キレイなツラだなー。もったいない。マジでミツの？物好きなや
つ……」

見分し終えた、というように吉樹がスツと身を引く。クラスの雰囲気はホッと緩んだ。無表情のまま亨は吉樹の隣を通り過ぎ、顔を伏せて光姫は亨の後に従う。

「

」

擦れ違い様の言葉に反応して光姫は俯いたまま目を見開いた。弁当を掴む手に力が入る。

お前、そんなヤツだった？

光姫は亨と向かい合って弁当を食べながら頭の中の混乱と格闘していた。

お前、そんなヤツだった？

確かに、今の光姫は昔とは全く違う　　違ってしまった。

でも。じゃあ、どうすればよかった。どうすれば……

光姫が引越したのは中学校にあがる直前だった。父親が海外に転勤になり、光姫は父の妹に預けられることになったのだ。その頃の光姫は、ハッキリ言って吉樹と大差ないガキ大将だった。物おじも人見知りもせず、暗くなるまで外で男子と遊びまくってるような

もちろん新しい場所に行ってもその性質が変わるわけがない。中学でも光姫は相変わらずガキ大将だった。外で転げ回ってよく怪我をしていた。亨と会ったのは中学二年の時だ。亨は転校生だった。当時から際立った容姿でほとんどが気後れして遠巻きにする中、光姫だけが普通に扱う。すると光姫の周りにいた者も亨を友達として受け入れはじめた。それから一年経って中学三年になっても光姫はまだガキ大将をやっていた。髪を短く切り、体に凹凸がなかったこともあって周囲からも女と扱われなかったし、本人にもその意識は薄かった。月に一度、面倒だと思っくらいで。しかし、亨だけは違ったのだ。

『光姫』

何の帰り道だったかは覚えていない。歩道橋の階段を上っているときだった。光姫と亨は二人で帰っていた。亨が足を止めて光姫を呼んだから光姫も立ち止まって亨を見た。

『何？』

『俺、光姫が好きだ。ずっと一緒にいたい』

突然の言葉に光姫は目をパチクリさせた。卒業が近いからセンチメンタルになってるんだな、とその日学校で、離れるのが嫌ー！と言った亜矢を思い出して光姫は一人合点した。

『うん、私も亨好きだよ。亨がどこ受けたか知らないけどどこ行っても友達だって』

照れるなあ、と頬をかきかき、光姫は視線を外しながら言った。その肩を亨がガシツと掴む。

『違う。友達の“好き”じゃない。言ってることわかる？』

その顔が真っ赤になっているのを光姫はポカンと見た。じわじわと意味が頭に染み込んでいった。

『……は？へ？私？』

『うん』

『え、ええ！？ええ！』

狼狽する光姫に亨は肩から手を離して微笑んだ。光姫の初めて見る切なげで大人っぽい微笑みだった。

『返事は……またでいいよ。じゃあね！』

クルリと身を翻して駆けていく亨を光姫は呆気に取られたまま見送った。

事件は卒業式の日起こった。卒業式が終わり皆でワイワイ騒いだ後、返事を聞かせてという亨に会うために光姫は待ち合わせ場所まで歩いてきた。その途中で光姫は亨の母に会った。亨の母は黒い艶々した髪を腰の辺りまで伸ばした上品で綺麗な人だった。ニコリと笑ってお茶に誘われ、大分時間に余裕があつた光姫は胸をドキドキさせながら頷いた。それは綺麗なお姉さんに誘われて喜ぶ男子中学生のようだったかもしれない。お礼をしたいの、と亨の母は言った。小学校ではあまり上手く人の輪に溶け込めなかつた亨がこつちでは毎日とても楽しそうにしている。それは光姫ちゃんのおかげだ。とお氣に入りの喫茶店に連れていってあげる、と亨の母は悪戯っぽい可愛らしい微笑みを見せた。光姫はぼうつとしながら頷いた。

青信号を渡っている時だった。車が突っ込んできた。亨の母は光姫を突き飛ばした。車はそのまま逃げた。通りすがりの人が救急車を呼んでくれたが、亨の母はそれまでもたなかつた。間際に亨の母は光姫の手を握って微笑んだ。光姫は一度だけ見物したことがある教会のマリア像に似ていると思つた。貴女が無事でよかつたわ、と彼女は言つた。亨をお願いね、とも。光姫は黙って頷いた。亨の母は静かに息を引き取つた。最後の息で夫と息子の名前を呟いたようだった。

誰も光姫を責めなかつた。逆に慰めてくれさえした。亨の父も。亨は母の棺の傍で放心しているようだった。光姫は何を言えばいいのかわからなかつた。無言で傍に寄つた。振り向いた亨はしがみついてきた。ごめんなさい、という言葉が光姫の喉まで出かかつた。それを言つのはひどく身勝手な気がした。結局光姫は黙つたままだつた。

『光姫 行かないで』

光姫は黙ったまま頷いた。亨をお願いね、と言った亨の母のマリア像のような微笑みを思い出していた。涙が出そうで光姫は奥歯を噛みしめた。

『本当？ずっと傍にいて？』

光姫はもう一度頷いた。

『約束だよ。絶対だよ』

“亨をお願いね”微かな息を振り絞った亨の母の言葉がもう一度耳元で聞こえた。光姫は口を開いた。喉が引き攣っていた。痛みが走り唾を飲み込んだ。

『約束、する』

サアツと風が吹いた。辺りが急に明るくなった気がして光姫は顔を上げる。曇り空の合間から太陽が顔を覗かせていた。

お前、そんなヤツだった？

吉樹の言葉がこだまする。向かいに座る綺麗な顔の男子生徒の弁当がほとんど減っていないことに光姫は突然気がついた。光姫の弁当も回想のせいではほとんど減っていない。

このまんまじゃ、駄目だ。

そんな衝動が光姫の中で身を起こしつつあった。でも、と反論する声は小さい。けれどそれもまた光姫の内にあるのだった。

お前、そんなヤツだった？

久しぶりに会った悪友の声が陽光に溶けて光姫を照らす。しかし長く伸びた髪は陽光を遮っていた。

だって、私のせいで。私のせいで。あの人は。

暗く濼んだ亨の目が光姫を責めているかのように感じて光姫は顔を強張らせて身を縮める。楽しかった思い出。太陽に引きずり出された過去をもう一度閉じ込めようとして

亨をお願いね

貴女が無事でよかった

耳に蘇る言葉にハツと顔を上げる。綺麗な顔の男子生徒　亨の、顔は。無表情で、目に澱んだ光。先程の場景が瞼の裏に浮かぶ。向かい合う亨と吉樹。吉樹の内から溢れるような光。亨の周りに感じられる暗闇。

亨をお願いね

貴女が無事でよかった

ガツン、と頭を殴られたような気がした。身の内に根をはるものが囁く。

私のせいで。私のせいで……本当に？

違う、と光姫は思った。沸き起こる衝動は怒りに似た焦り。なんで。なんで忘れていたんだろう。こんなに大切なことを。

弁当が目に染みる。それを光姫に渡す叔母の悲しげな顔が思い出された。心配してくれる人は、確かにいる。見えていなかっただけ。見なかっただけ。

風が澱んだ澱を吹き飛ばす。太陽が照らし出したそこは底無し沼などではない。ただ底無しだと思い込んで諦めていただけ。

昼休みに一念発起した光姫は次の授業も全く聞かないで考え込んでいた。

どうにかしなくちゃいけない。でも、どうやって？

底無しではなくても沼にはまり込んでいることに違いはない。光姫は授業が終わったことによやく気付いてトイレに向かった。用を足して手を洗う。前を見ると長い髪の子が光姫を見返していた。自分の顔とも思えず、光姫は一瞬幽霊を見たかのようにギョツとした。

「ちよっと」

険のある口調。鏡の隅に映る女子。光姫は振り返った。いつもはトイレに行ったからといって身の危険を感じることはない。なんで？そう考えて光姫は気付いた。律がないからだった。

「亨君と別れなさいよっ！」

甲高い声で叫ぶ。トイレの外にも聞こえているんじゃないかと光姫は頭の片隅で心配した。

「あんたには関係ないよ。私と亨の二人のことだから」

「何よ……亨君の苦しみも何も知らないくせに！彼女の癖に！一番近くにいられる立場なのに何も気付いていないあなたが！なんで亨君のそばにいられるのよ！亨君が寝られないの知ってる？亨君がご飯食べられないの知ってる？知らないでしょう！なんで、なんで、あなたが！」

「……寝てない？食べてない？」

光姫は呆然と呟いた。

「そうよ！それも気付かないあなたなんか……別れなさいよ！」

「あんたの口出す話じゃないよ」

混乱する。それでも口が勝手に動いて応戦していた。寝てない。食べてない。本当に？多分本当だ、と光姫は思う。亨の母が死んだ直後とひき逃げ犯が捕まった直後も亨は軽い不眠と拒食になっていた。いつからだろう。いつから。前は気付いた。今は気付かなかった。

亨をお願いね

変えなくては、と光姫は痛感した。変えなくてはならない。

「別れなさいよっ！」

銀色の光が光姫の目を射た。光姫は反射的に後退しかけたが、女子生徒は光姫の髪をぐいと引っ張り、光姫の体は前に傾いだ。銀色の光が閃いた。

「ッたあ」

頬がじんじん痛い。手を当てるとぬるっとした感触。少し血が出ていた。

女子生徒は怒りと憎しみで罪悪感をすぐに押し隠したようだった。頬に当てた光姫の手にちくちくしたものが当たる。髪の毛先だった。

「わ、別れなさいよ！」

女子生徒の鋏を持つ手が震えていた。それが見えるのは彼女に左の髪を切り落とされたからだ。今なら光姫はその目の奥の傷付いた何かを見つけることが出来た。

そっか。

その鋏が光姫の迷いも一緒に切り落としたかのようにだった。

そっか。簡単だ。

取るべき道がまつすぐ見える。光姫は女子生徒から鋏を奪い取った。

ジヨキッ

「きゃっ！何……を……し、て……」

ジヨキジヨキと鋏が動く度に黒いものが床にたまる。

「これ、ありがとう」

光姫は鋏を女子生徒に返し、頭を振る。頭が軽い。視界が啓けて格段に明るくなった。

保健室にいかないよ。

光姫は振り返らずにトイレを出た。

後編

光姫の髪を見た保健医は何か勘違いしたらしく、何も言わずに放課後まで保健室にいさせてくれた。おかげで光姫はしっかり考える時間があった。

今日やらなくちゃいけない。

物事は勢いがあるうちにやるのが吉という。吉樹の無駄に有り余ってそうなエネルギーを貰ったのか、気力のある今やらなければ。

亨のお母さんが望んでいたのはこんな亨じゃないはずだ。二人して自滅しそうな今を喜ぶわけがない。

“約束”した時にはまだこんなではなかった。何時から歯車がズレはじめたのだろう。

考えに没頭しながら荷物を取りに教室に向かった光姫は光姫が姿を現した途端にざわめきだしたことに気付いていなかった。

あれは誰、とほとんどの者が驚いた。長い髪を垂らしていつも俯いていた陰気な女子生徒はもういない。いるのは顎くらいに切り揃えた髪とまつすぐ前を見据える、美人でも特別可愛らしいわけでもないのにやけに目につく女子生徒だった。それは今にも笑いだしそくにキュツとつりあがった口の両端かもしれないし、目の生き生きした強靱でしなやかな光のせいかもしれない。

一人の男子が恐る恐る、といった風に光姫に声をかける。

「幸田？」

「というか、亨のお母さんを私が殺したとか……なんであんな考えに。私は阿呆か。」

光姫は眉間に寄ったしわを伸ばす。

「幸田？」

「ん？えつと、藤村？」

「クラスメイトだ。うる覚えの名前を呼ぶと彼は驚いたように目を見開いた。」

「俺の名前覚えてたんだ？」

「ん……まあね」

勉強は得意じゃないが人の顔と名前を覚えるのは得意だ。というか人付き合いの基本だと光姫は営業部のエースである。らしい父に叩き込まれた。だというのにうる覚え。ちよつと居心地が悪い。しかも覚えてることに驚かされているし。このクラスになってからの自分の非社交っぷりを思えば無理ないが。

「てか、ゴメン実はうる覚え。一年の時に同級生の顔と名前はだいたい覚えてただけどなあ……」

二年になってから鬱々としていたせいですっかり忘れかけていた。父さん知ったらなんて言われるか。鉄拳制裁を思い出して光姫は

青ざめる。

「ンン、何か用？別に用じゃなくってもいいけど」

「真由が言った通りだ……」

「ん？おーい？」

首を傾げて藤村の鼻先で手を振る。

「あ、ごめん。篠原からの伝言。彼氏連れていつものところまで来てくれないかって。頑張れよ！」

「お……おー！頑張る！」

戸惑いながら拳を突き出す光姫に藤村はプツと吹き出した。

「クツクツクツ……ああ、頑張って」

光姫は初めて亨のクラスに足を踏み入れた。

「亨ー」

中に入ろうか迷って結局入り口から手を振る。亨より先に亨の周りの女子集団がギンツと反応した。一年から三年まで色んなタイプの女生徒がいる。共通点は皆自分に自信がありそうなところか。

反撃を、すればよかった。

光姫はつくづくそう思った。向こうからメールが来るということ
は向こうのメルアドがわかるということ、いくらでもやりようが
あったはずなのだ。

「何しにきたの？」

一人の女生徒の言葉はその集団の意思を代弁しているようだった。
それを光姫はあっさり切り捨てる。

「んと、誰だか知らないけどあんたにや関係ないよ。私が呼んだの
は亨なんだけど？」

「亨君はあんたとは行かないわよ。名前だけの彼女は黙って家に帰
れば？」

今まで放っておいたくせに、今更咎めるのか、と。

責める眼差しを光姫は笑って跳ね返す。

「名前だけでも彼女は彼女。私が話し掛けてんのは亨なわけ。明日
以降ならいくらでも喧嘩買っよ？この頃喧嘩してないからひよっと
したら負けるかもしれないし。でも今日用があるのは亨なの」

亨を見る。亨はどこか呆然と光姫を見ていた。

「
亨」

一步踏み出す。亨は一步後じさった。それでも彼の無表情は崩れない。

ああ、もう。

選択を間違えたことをまざまざと思い知らされる。どこで間違えたんだろう？きつと、修正できる場所はたくさんあった。

でも、もう気付けた。もう、同じ間違いはしない。

「亨。行こう？」

手を伸ばす。一步寄る。亨は動かない。周りも固唾を呑んで見守っていた。

もう一步。一步。一步。一步。亨は動かない。

「つかまーえた！」

手を取って、笑う。

「さ、行こう」

亨は大人しくついて来る。その瞳はまだどこか茫洋として夢と現実の境をふらついているかのようだった。

「な……によ、今さら現れて！亨君がどんなに貴女を待ってたか知りもしないくせに！……私たちの方が、ずっとずっと亨君が好きなのに！」

泣きそうな声。　可愛い。いやいやいや。緩みそうになる口元を引き締めて真面目な顔を作り、光姫は振り向いた。

「うん。ごめん。好意の量ははかれないと思うけど。　でも、ごめんなさい」

ああ、でも嬉しい。

光姫は今猛烈に感動していた。口元が緩むのを止められない。泣きそうだった。

亨のことを好きでいてくれてる子達が、こんなに！

「な………によ、泣きたいのはこっちの方だからね！というか口が笑ってるわよ気持ち悪い！」

「え、気持ち悪い？」

ショック。

その拍子に涙が一滴ポロリと零れた。女生徒達ははつきり怯む。

「な、何よ」

「おや」

涙を拭って光姫は呟く。その拍子に時計が見えた。

「あ、こんな時間！　もう行かないと。喧嘩は明日以降買っからね！亨、行くよ！」

早足で歩く光姫と大人しくついていく亨を啞然としてと見送る生徒たち。その光景は学校を出るまで、光姫の通ったあとにくっきり残っていた。

いつもの場所、というのは古い神社だ。光姫はよくここで律に愚痴っていた。

うあああ！

正直、辺りを転げ回りたいくらい恥ずかしい。何どっぶり浸かっていたんだろう。

「ンホンッ……行こっか」

取り繕うように光姫は咳ばらいして石段を上りはじめた。

「おー、ミツ！ちゃんと姫じゃありえなくなってるじゃん」

「……なんであんたがここにいるんだサルヨシ！」

「私が呼んだ」

吉樹の後ろから律が顔を出した。強張った笑みを顔に乗せている。

「「……あの」

光姫と律の言葉が重なった。

「……律、お先にどうぞ」

「うん、ありがとう。……あの、ね。私、亨君と寝ようとした」

「うん」

光姫は神妙に頷く。だが途中で気付いた。寝ようとした？

「あ、でも亨君に断られた！」

手を振り振り律が慌てて言う。

「ごめん。それずっと謝りたかった。私……亨君のこと好き。でも、光姫のことも好き。だから二人を引き裂こうってつもりはなくて。元に戻って欲しいと思ったの。光姫に。今日菅田君が入ってきた時、一瞬中学の時の光姫かと思った。思い出して欲しいの。光姫ってこんな感じだったよ」

「いや絶対違うし全然違う」

光姫と吉樹の声が重なった。光姫は吉樹を指差してきっぱり言う。

「私こんな阿呆じゃないし」

「俺こんな馬鹿じゃないし」

「そつくりだよ二人とも」

律が笑いながら言った。光姫は口を尖らせる。

「でももう私なんかする前に光姫ちゃんと戻ったみたいだねよかった」

「うん。それはサルヨシのおかげ」

「おい、サルヨシやめろ」

「うっさいよヨシ。今日の昼休みに亨とヨシが並んだでしょ？あれ見てから考えてて。亨、なんかすごい不幸に見えた。で、よくよく考えたら、私すごい間違えたなって」

「何が？俺と付き合いはじめたこと？」

「え」

亨の言葉に律が体を強張らせた。縋るように光姫を見る。だが光姫はしっかり頷いた。

「そんな！光姫、私はそんなつもりじゃ」

「悪いけど律のことは全然関係ないよ。私、知ってた。律が亨のこ
と好きなの。 いや、二週間くらい前からだけど」

光姫はふうつと息をついた。

「でもわかっててもどうしようとも思ってた。全然やる気がで
なくて、なるようになればいいって。ごめん」

「そんなこと……好きになっちゃった私が悪い」

「違う。もともと恋愛感情持ってたのに、亨と付き合いだし
た私が馬鹿だった」

「 亨君！」

「へっ？」

「おっ、と」

握っていた亨の手から力が抜けた。光姫がそう気付いた時には吉
樹が亨を支えていた。

「おい、気いなくしてる。どうすんだ？」

「あー……うちの木陰に寝かせよう」

「よい、せ」

吉樹は脇に手を入れて足を地面に引きずりながらズリズリ運んだ。律がオロオロする。

「ど、どうしよう。私が余計なことしたせいで……」

「まさか。律が吉樹呼んでくれて助かった。頭打たなくて済んだし。それにちよっと安心した。亨が声出なくなってたらどうしようと思ってたから」

「まさか！ちゃんと喋ってたよ。亨君」

「うん　私の前で声出なくなってる可能性もあったし」

「なー俺もっお呼びじゃねえみたいだからあっちいるな。お前らまだ話し合っただろ？もしなんかあったら叫べ。声届くところにいるから。そいつ一応男だし……えれえ痩せてっけど」

肋骨浮き出てっぞ、と吉樹は言って身を返そうとした。

「あっヨシ、待って。一つ聞いときたいんだけどさ、何で私だったの？窓見てたから顔は見えなかったよね」

「ん、ああ。ホラ」

吉樹は携帯を出して光姫に見せる。そこには暗く強張った顔付きで道路を渡る光姫がいた。

「うわーおう」

光姫は思わず顔を押しさえて呟いた。ひどすぎる。こんな顔をしていたのか。

「これ今年の夏休みに真由が彼氏ンとこ行った時に撮った写真。お前中学ん時はよく帰ってきてたのに高校になってからサツパリだろ？一応心配してたんだよ。したら真由がこんな撮ってくるし真由の彼氏が話すミツの話はひでえしで、俺は編入するはめになった」

「……………は？」

有り得る。

吉樹の言葉の指し示す可能性。

吉樹んちのおじさんおばさんなら有り得る……………！

「それって……………」

「あ、向こうに戻るつもりはねえぞ。もう一回編入試験受けるのは

「ごめんだ。せつかく一人暮らしだしな」

「……………」

「えーっと、話が見えないんだけど……………」

律が混乱した様子で申し出た。

「つまり、私が心配だからって、おじさんおばさんはヨシを転校させたって、こと……………だと思う」

「え……………」

律は絶句して吉樹を眺めた。

「気にすんなって。お前、俺と立場反対だったらどうしてたよ？」

「そりゃ転校でも何でもするけど……………」

光姫は反射的に答えた。

「だろ？」

「え……………っと、二人ってどんな関係なの？」

「だから、悪友だって」

二人の声はピッタリ重なった。

「私の方は清廉潔白だけどね」

「よく言う。大抵計画練ってたのミツだろ」

「……発案者はヨシでしょ」

「じゃあ、恋人とかそんなんじゃないかって……?」

「まさか!」

「ヨシと恋愛するくらいならゴジラとするよ」

「小ニン時に将来の夢をウルトラマンの奥さんって言ってたやつがよく言う」

「あれは!ヨシが女じゃウルトラマンにはなれないって言ったからじゃん!自分は世界征服とか言ってたくせに」

「あんなー。世界征服は男のロマンなんだぞ。見ろ、どこでも悪役はたいてい世界征服を狙ってるだろ。雇われて正義の味方してたり副業で正義の味方してたりするやつとは格が違うんだよ」

「でも最後には正義が勝つじゃん」

「そりゃ国家がバツクについてるもんな。資本力が違う。やっぱり最後に勝つのは正義の味方じゃなくて金だからな」

「そこでお金を持ち出したら子供の夢が台なし」

「二人とも?脱線してない?」

「あ、そうだったそうだった。俺もう行くな。……あ、そうだ。なんと真由の彼氏はうちのクラスの藤村だぜ」

「ああ！」

彼の不可解な言葉がようやくわかった。光姫はポンと手を打つ。

「……ん」

亨が小さく呻いた。

「亨君！」

「じゃ、俺あっち行ってるわ」

「ありがとねー」

「おー」

光姫は吉樹にヒラヒラ手を振り、大きく息を吸って亨に向き直った。傷付ける覚悟を決めなくてはいけない。前に進むために。

「……う」

心配そうに顔を覗き込んでいた律は亨の目覚めそうな気配を感じ取って光姫に場所を譲ろうとした。それを制して隣から覗き込む。

「……光姫？」

黒い瞳に確かに自分が写っていた。光姫は密かに胸を撫で下ろす。

「おはよう、亨。随分久しぶりな気がする」

具体的には五ヶ月ほど。

「……ああ」

亨は上体を起こした。それを手伝いながらゾツとする。亨はひどく痩せていた。

全然、気付いてなかった。

傍にいる、その約束を違えるつもりはない。けれどこの形はだめだ。恋人にはどうやったってなれない。

「亨、私が言ったの覚えてる？」

「……覚えてる」

亨は自嘲気味に口の端をつりあげた。

「本当はいつ言われるかと思ってた」

「……そっか。ごめん」

「本当に悪いと思ってる？光姫が謝ってるのは自分が間違えたことに対してだろ？でもあの記憶は俺にとっては大切なんだ。光姫が俺を恋愛感情で好きじゃないのは知ってた。母さんに対する罪悪感とかなんかそんなんで縛り付けて無理矢理傍にいるのも。それでも、俺にとっては大切なんだ……！」

光姫は黙り込んだ。そんな感情を持ったことはない。だからよくわからなかった。そうなのか、と思うだけ。共感もできずに戸惑うしかない。

「それを、間違いだっただけ？そんな一言で捨てられて、どんな思いがすると思う……？」

「でも、亨」

「わからないだろ！だってそんな感情を持ったことがないから！なあ、同じ想いを返してくれなんて言わない。言わないから、せめて約束通りに傍にいてくれ……」

すう、と光姫は息を吸った。吐く。

「亨」

「……何」

叫びきって虚脱したような。その顔を見た瞬間、最後の躊躇が消えた。光姫は覚悟を決めた。

「ごめん。亨の言う通りだよ。約束は守る。傍にはいるよ。でも今まで通りにはいかない。恋人っていう形で傍にいるのはやめよう。私は亨を」

流石にためらった。亨の顔に浮かぶ絶望的な予感を見て。律の哀願を感じて。

「亨を友達にしか思えないよ。それ以外にはどうやっても思えない」

「それでもいいから！」

「よくないよ。今の状態を見て、どうやっていいなんて言える？」

「ご飯を食べてる？ちゃんと寝てる？食べられないでしょ。寝られないでしょ。ぶりかえしてるんでしょ」

今のままは、駄目なのだ。

「亨、私に対して依存がまったくないって言える？純粹に恋愛感情だけだって」

「……………」

亨がためらった。光姫にとってはその事実だけで十分過ぎるほどだった。

「別れよう。今のまんまじゃもつとひどくなる。私は亨の傍にいて言つときながらこの頃全然傍にいなかった　顔合わせても相手見てないんじゃないよ。傍にいてるなんて言えないよ。こんなじゃおばさんとの約束も守ってるなんて言えない」

「……………母さんとの？約束？」

「そう。亨をお願いねって言われた。あと私が無事でよかつたって……………すごく素敵な人だった」

「母さんとの約束を守るために俺の隣にいたんだ？」

「違うよ。確かにおばさんの言葉がなかったらひよつとして付き合
うなんてことに頷かなかったかもしれないけど。でも亨は大事な友
達だから、私が出来る限りのことはしたよ」

「そう。友達……ね。光姫が決めたのはあの転校生のせい？」

「違う……いや、そうかな。そうだな。ヨシがあんまりにも普通り
だったからかな。しかもサラツと痛いところ突くやな奴だし。きつ
かがヨシだったのは間違いないよ。私はこのままじゃ駄目だっ
てわかってたけど、ヨシが来るまでなんかする気力もなかったし。こ
のまんまじゃあ亨のお相手の誰かに刺されて死ぬかもって思っ
てたけど」

「……俺は光姫と一緒に死んでもいいのに」

「私、嫌」

間髪いれない光姫の答えに亨は暗い顔で黙り込む。

「悪いけど、私、そういうタイプじゃない。死ぬときは孫に囲ま
れて笑いながら大往生って決めてるから」

「……そう」

「そう。だから別れよう。その後どうするかは亨が決めたらいいよ。
友達でいいならずっと傍にいる。顔も見たくないならそうする」

「 狡いよな。そうやって。俺には光姫しかいないのに。俺は頷
くしかないのに」

「そんなことないッ！」

叫んだのは、律だった。

「あ………」

律は思わず、というように叫んだ後、パツと顔を伏せた。

「篠原………?」

亨の顔には純粹な驚きがあった。律の存在に気付いていなかったようだ。光姫は顔を真っ赤にしている律の肩をポンポンと叩きながら言う。

「亨の傍には亨のこと心配してる子が山ほどいるよ。亨には私しかないわけじゃない。もう私がいなくても亨は一人じゃない。私が目を逸らしてる間もその子達はちゃんと亨を見てたよ」

「……………」

「それに亨は私が亨の想いをないがしろにしてると思ったかもしれないけど……そうかもしれないけど、私は告白されたの初めてだったし、それは嬉しくて大切な記憶だよ。それじゃ駄目？」

「……………」

亨の目が髪が短くなった光姫を写し、俯いた律を写し、光姫に戻る。はあ、と大きく息を吐いて。

「…………フルのか優しくするのかどっちかにしてくれる？」

不機嫌な声。関節が白くなるほどに握り締めた拳を見ればどれほど忍耐しているかが容易にわかる。

「ごめん。じゃあ……亨のことを恋愛感情で好きになれないの。別れてほしい」

「……………わかった」

カアーツ、と枝にとまったカラスが鳴いた。

亨の目は確かに光姫を写していた。その瞳の奥にはひどく傷付いて、けれど輝くことをやめない小さな小さな光がある気がした。光姫は律の手を握り亨の手を引っ張って立たせる。その手が振り払われることはなかった。

「じゃ、帰ろっか！」

空を仰ぐと一面に晴れ渡って、残暑の太陽がわずかばかりの苛烈

みと標をかみを混ぜ合わせて地上を照らしていた。

後編（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。

2010.6.15.17時頃 加筆修正

おまけ（前書き）

話そのものは後編で完結しています。このおまけは蛇足になるかもしれませんが。

吉樹が家に帰らないでそのまんまじゃん……とか、そういうところを拾い上げるために書きました。完全にストーリーのフォロワー的位置付けです（作者の中で）。それでもいいという方はお読み下さい。

おまけ

吉樹は石段の下に座ってぼうつと空を眺めているようだった。

「ヨシー！」

「お？終わったのか」

振り返り、手を繋いでいる三人を見て呆れを滲ませる。

「お前らいくつだよ……」

「うっさいなー。てか、ほんとに待ってたんだ」

「帰り道わからねえし」

「なる……」

「あ、菅田君ごめん」

ほとんど無理矢理連れてきた律が肩を小さくして謝る。

「んや、別にいいけど。あ、そーいや俺は菅田吉樹。今日転校してきた。ミツと同じ小学校だったんだ。納豆よりねばこい腐れ縁、つてやつ？ま、とりあえずよろしく」

「……俺は田村亨。よろしく」

複雑そうな顔の亨に気付いているのかいないのか、吉樹はニカッ

と笑う。

「じゃ、よろしくな亨」

「うわ、馴れ馴れしい」

「んだよ。お前のダチなら俺のダチだろー？」

「何そのジャイアン！」

「なんか二人って本当に仲良いねえ」

しみじみ、といった感の律の言葉に光姫と吉樹は顔を見合わせた。

「そーかなあ」

「さあ、普通じゃねえ？」

「だよな」

「いや、かなり仲良いと思うけど」

亨が言うつから、二人はもう一度互いにマジマジ眺めあった。

「そーかなあ？」

「そついやどこに住んでんの？」

亨と律と別れた後も吉樹は光姫の後をついて来ていた。同じ方向かと思つて放つておいたが、いつまでもついてくる。

「隣」

「そりゃ何かの隣でしょうよ」

「や、お前んちの隣。三〇五号室。よろしく。飯とか世話になることになってるから」

「……え？」

「おばさんがなー。えらい俺がこつち来たこと気にしててな。世話してくれるって。ラッキー」

「……ああ」

なるほど。光姫は頷いた。これはお礼を言ったほつがいいんだろつか。だが今さら言いにくい。でも。

「……う、その、何て言うか、ありがとう」

吉樹は意表をつかれたように光姫を見た。

「な、何」

「いやあ、何でも。昼飯一ヶ月分でもいいぞ」

「え、高っ!？」

光姫は思わず叫んだ。昼ご飯一ヶ月分というと、小遣いが……。亨にも半分払わせることにしよう。

「なあ、ミツ道間違えてんじゃないかね?いくらなんでも全然見覚えねえんだけど」

「間違えてないよ。家に向かってないだけ。さっきの道を右行つて左ななめ行つてまっすぐ行つたら学校出るから、学校からはわかるでしょ?先に帰るんだつたらどうぞ」

「どこ行くんだよ?」

「病院」

頭の上にはなマークを浮かべながらも吉樹はそのまま光姫についてきた。

光姫が向かったのはこじんまりとした個人病院だった。内科小児科、と看板が出ていて、中には数人待ち人がいる。

「初めての方ですか?保険証を出してください」

受付に座る女性が制服を着た二人連れに怪訝な色を浮かべながらも愛想よく言った。

「いえ、診察に来たんじゃないんです。時間が空いたら先生に幸田光姫が来たとお伝えくださいませんか？患者さんの後でいいんで」

「え、ちょっと……！」

言いたいことを言うと光姫はさっさと受付を離れて椅子に座った。吉樹も隣に腰掛ける。後から女性が追いかけてきた。

「ちょっと、困るよこういうのは。病気の人をみるっていう大切なお仕事なんだ。面白半分で邪魔していいことじゃない」

「先生に幸田光姫が来たとお伝えください。先生が会わないとか、何時なら会つとか言うなら諦めます」

「あのねえ……」

「お願いします」

頑として譲らない光姫に女性はとうとう諦めて受付に戻った。にこやかに診察室から出てきた患者に受け答えしている。

「なあ、何しに来たんだ？」

吉樹はひそひそ声で尋ねた。

「ここ、亨のお父さんの病院なの」

「へえ」

光姫はそれきり口を開かない。患者が二人出て行き一人来た。光姫と吉樹は受付から視線を感じながら待っていた。

「……なあ」

小さな声に、まっすぐ診察室の扉を見ていた光姫は隣を向いた。床を見つめる吉樹は珍しく何か後悔しているようだった。

明日、槍でも降るの!?

驚く光姫に吉樹がすっかり目を合わせる。

「じめん」

「……は?」

「俺さ、本当はミツの叔母さんにさ、中学卒業した後に、一日でいからミツに会いにこっち来てほしいって言われてたんだ。でもその頃ちよつとごたついててな。行かなかった。悪い」

「はあ……いや、全然構わないけど」

「ああ、ミツは気にしないのは分かってたんだけどな、これで気がすんだ」

そう言って笑う吉樹に先程の後悔はまったくくない。夏の青空のように清々しい笑みだった。光姫は拍子抜けしながらも深く納得した。そうだ、こっぴつヤツだよ、こいつは。

とうとう最後の患者が出て行った。空は暗く星が見えはじめている。受付の女性は不機嫌な、どこか諦めたような声で光姫を呼んだ。

「……幸田さん。診察室で先生がお待ちです」

立ち上がる。光姫の腕を吉樹がちよいと引つ張った。

「おい、大丈夫なのか？」

光姫は意味を量りかねて吉樹の推し量るような視線を見返す。ハッと、気付いた。知ってるんだ。あの事故のことを。

何を読み取ったのか、吉樹の手が光姫の腕を解放した。大丈夫だな、というように頷く。

「俺ここで待ってるな。あの受付の姉さん怖いからさっさと戻ってこいよ」

「ん」

わざと大袈裟に肩を震わせる吉樹に光姫もニヤツと笑い返して診察室に入った。

全体的に白い部屋の中に白衣を着た中年の男がいた。複雑そうに光姫を見る彼の顔は整っていて高校生の息子がいるとは思えないくらいだが。老けたな、と光姫は思った。もっとも比較対象は亨の母の葬式での男だからもう一年半以上前なのだが。

「お久しぶりです」

「ああ、久しぶりだね。そこに座るといい」

「ありがとうございます」

礼を述べて光姫はまっすぐ亨の父を見た。どうしても胸をチクチク刺す罪悪感は、きつと一生消えない。けれど、それを過剰に気にすることはやめたはずだったし、何よりそのことを話しに来たわけではなかった。

「私、亨と別れました」

男は目を見開いた。それが付き合っていたことに対するものなのか、それとも別れたことに対するものなのか、判じかねて光姫は一拍間を置く。

「亨は多分、拒食と不眠になっていると思います」

ガタ、と大きな音を立てて亨の父は立ち上がった。その手から零れたペンが足元を転がる。光姫が黙っていると、彼はゆっくりペンを拾って座りなおした。

「……それがわかっていて君は亨の傍を離れるのかい？」

「だから、です。このままじゃ二人ともおかしくなってしまうから。亨は自分には私しかないって言うてました。多分、お父さんと、何か行き違いがあるんじゃないかと……思って。お願いします。亨をちゃんと見てあげてください」

「
」

男は小さく何かを呟いた。君がそれを言うのかい、と言われた気がして光姫は唇を噛んだ。息を吸って、吐く。過去からは逃れようがないけれど、飲み込まれてもいけないのだと、今日学んだはずなのだ。

「お願いします。亨をちゃんと見てあげてください」

「私が亨を見ていないと？」

「少なくとも、亨は。私が離れたら一人ぼっちになると、思っています」

亨の父は押し黙った。光姫はさっと立ち上がる。言いたいことは言った。

「私が言いたかったのは」

躊躇う。ごめんなさい、とやっぱり喉元まで出かかっていた。あなたたちから大切な人を奪ってしまつて。

“貴女が無事でよかった”

違う、勘違いするな。私が奪ったわけじゃない！

「これだけです。お時間取らせてすいませんでした」

光姫は頭を深く下げてから踵を返した。診察室の扉が閉まる直前、声がかかった。

「……幸田さん。知らせてくれて、ありがとうございます。君でよかったよ」

光姫は振り向いた。診察室の扉は既に閉まっていた。

「あははは、ありがとうございます。機会があったら……お、ミツ。遅かったな。終わったのか」

いつの間にか受付の女性と歓談していた吉樹が振り向いた。口元には笑みが浮かんでいて、目は絶えない光があった。全身から生命力が溢れている気がした。

「ん、終わった」

終わった。やれることは、全てやった。

外に出ると月はなく、星がよく見えた。星を見るのも久しぶりだ

った。体が軽くなったような気さえする。

「あー……腹減った」

吉樹が情けない声を上げる。タイミングよく腹の鳴る音がした。光姫はあははは、と笑いかけ。

「今……何時だっけ」

「んー？八時すぎ……くらいか？」

「やばっ！叔母さんに連絡してない！」

「あちゃー」

「晩御飯抜かれるかも！」

「何イ！？」

吉樹が目を剥く。

「おい、早く帰るぞー！」

「ちょっと、待ってよそっちは反対！」

おまけのおまけ

冷えた料理の前で光姫の叔母はさらに冷え切った笑みを浮かべていた。光姫と吉樹は身を縮める。叔母は吉樹を歓迎するためにご馳走を作って待っていたらしかった。

「私は今日仕事を午後から休んで作ったのよ」

「「ごめんなさい……」」

「連絡もなしにこんな時間までどこをほっつき歩いていたのかしらね？」

「「すみません……」」

ひたすら小さくなる二人を見、叔母はまったく、と呟く。

「……今日だけよ。今度から連絡なしに七時を過ぎた場合は夕飯抜きとしますからね！」

「よっしゃー！」

「やったー！」

はしゃいで手を洗いに行く小さな子供のような二人の姿を見て彼女はまったく……と呟きながらため息をついた。久しぶりに見る明るい姪の笑顔に、そのため息の成分がほとんど安堵で、目尻が潤んでいたことは、彼女しか知らない。

おまけ（後書き）

最後まで読んで頂き本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n99771/>

空を仰いで手を繋ごう

2010年10月10日21時46分発行